原著論文

中高年女性の結婚体験から生き方を支える要因の検討

奈良県立医科大学医学部看護学科[1]　元京都光華女子大学人間科学部社会福祉学科[2]
大阪保健福祉専門学校看護学科[3]
泉川　孝子[1]　梶浦志保子[2]　白野美代子[3]

Reflecting on their marriage life supports the lifestyle of middle- and advanced- aged women

Takako Izumikawa[1], Shihoko Kajiura[2], Miyoko Shirano[3]

Faculty of Nursing, School of Medicine ,Nara Medical University[1]
Department of Social Welfare, School of Human Science, Kyoto koka Women's University, retired [2]
Osaka College Health and Welfare Nursing program[3]

要　旨

本研究の目的は、人生の節目にある中高年女性の結婚体験の振り返りから、生き方を支える要因を検討することである。A主催の老後を考える会の50歳後半～70歳代の50名を対象に体験記の協力を依頼し、郵送にて10名返信された。そのうち70歳後半を除いた結婚経験のある女性5名を分析対象とした。体験記の内容を質的帰納的に分析し、自己肯定的表現、否定的表現から生き方を支える要因を明らかにした。結果、肯定的表現のカテゴリーは、【夫婦仲】【社会的活動】【子育て】【高い自尊感情】の４つであり、否定的表現のカテゴリーは、【生活上の困難】【自己の負担感】【夫婦の乖離】の３つが抽出された。また希望的表現からは、【これからの人生の生き方】であった。

以上から、１）自分の環境の中で、自己を肯定できる状況を作り出す力、２）半生を整理し自信を持って、次の人生に踏み出そうとしている要因が示唆された。

キーワード：中高年女性，　結婚体験，　人生の振り返り

Ⅰ．はじめに

長寿社会が到来し、誰もが心穏やかな老後でありたいと願うはずである。宮内（1994）は、この高齢社会を幸福に生き抜くためには、本人自身が独立自尊のライフデザインをもつことが根本であり、また60代は夫婦関係を再構築する時代であると述べている。夫（妻）の定年を迎え人生の再出発を機として、かなりの意識革命が必要となる。その定年後をうまく送るためには、個人要因に加え準備状況の良し悪しに左右され、老年期の前段階と位置づけられる中年期の準備状況が老後の人生や健康保持の鍵となると報告されている（大西ら、2008）。

本研究では、A主催の老後を考える会に参加した50歳前半～70歳代の、協力が得られた人生の節目にある中高年女性に焦点をあて、結婚体験から人生を振り返った記述を分析し、生き方を支える要因を明らかにすることを目的とした。このことは、中高年女性の結婚観・人生観の理解につながると考えた。

Ⅱ．用語の定義

中高年女性：本研究では、人生の経験を積み円熟した年頃であり、人生の節目にある中高年に相当する女性とした。

Ⅲ．研究方法

1．対象者：A主催の老後を考える会の50歳後半～70 歳代の既婚、未婚、性別を問わず、原稿協力依頼を50名に行った。

2．調査期間：2005年6月～2006年3月。

3．データ収集：A主催の老後を考える会に参加された際、依頼用紙に研究目的と調査内

容：結婚に関する①出会い、②家族の理解・努力、③親戚との関係、④現在の環境、⑤将来展望等の記述を明記し、中高年の結婚観・人生観について調査したい旨を説明後、手渡しで1600字程度の体験記を依頼し、後日郵送にて返信された。

4．データ分析：対象者が記述した体験記から、今までの結婚体験、人生における肯定的表現、否定的表現、これからの希望を表す文脈を事例ごとに分類した。質的分析の過程においては、研究者の共通概念としてハビーガーストの成人・老年期の発達課題（表1）を参考に、3名全員が同意したもので信頼性の確保に努め、文脈をデータ化しコードを抽出した。さらに類似性に従いサブカテゴリー、カテゴリー化を創設しネーミングした。

表1．成人・老年期の発達課題
（Havighurst, R, 庄司雅子訳 1958）

＜成人期＞
おとなとしての市民的、社会的責任の達成
一定の経済水準の確立と維持
十代の子どもが信頼できる幸福なおとなになれるよう援助すること
おとなの余暇生活を充実すること
自分と配偶者を一人の人間として結びつけること
中年期の生理的変化の理解とそれへの適応
老年の両親への適応
＜老年期＞
肉体的な力と健康の衰退に適応
隠退と収入の減少に適応
配偶者の死に適応
自分と同年輩の老人たちと明るい親密な関係を確立
社会的・市民的責任を引き受けること
肉体的生活を満足に送れるように準備

5．倫理的配慮：A会主催の代表者に研究目的、方法、倫理的配慮について、説明後承諾を得た。また対象者に研究協力は自由意思であること、データの匿名性、プライバシーの厳守及び研究目的以外は使用しない旨、記載した執筆依頼書を説明後手渡し、返送された体験記をもって承諾が得られたとした。尚、記述内容から個人を特定するデータの匿名化を厳守した。

Ⅳ．結果

1．対象者の属性：返信された10名は、すべて女性であった。そのうち社会文化的背景が比較的近似し、結婚経験のある中高年層にあたる50歳後半～60歳前半の4名、及び老年初期の70歳前半1名を分析対象とした（表2）。

2．対象者5名の体験記からは、自己の肯定的表現、否定的表現、希望的表現の記述数は227であり、これらは46コード、19サブカテゴリーを形成し、中高年女性の結婚体験の振り返りを示す8カテゴリーを抽出した。以下カテゴリー毎に説明する。尚、カテゴリー【】サブカテゴリー『』、コード「」、記述単位のデータ＜＞として示す（表3）。

1）肯定的表現のカテゴリーは、記述数が多い順に、【夫婦仲】【社会的活動】【子育て】【高い自尊感情】の4つが抽出された。

（1）【夫婦仲】は、『夫婦の努力』『夫婦の認め合い』『夫婦以外の協力』の3つのサブカテゴリーで構成される。

『夫婦の努力』は、「夫婦の形態」として＜役割分担＞＜二人だけの生活＞、「出会い」の＜小学校のクラス会＞＜何人かの男性から学生時代から憧れていたと告白される＞、また＜幾度も苦労をかけた＞＜遠い所で眠っている彼が喜んでくれている＞と「夫への思い」を記述している表現がある。『夫婦の認め合い』は、「夫（妻）の生き方」として＜夫は畑仕事が趣味＞＜学生運動に身を置いていた夫＞、また＜夫の子どもを指導するすぐれた指導力＞＜舵取り役の夫がいてこそ成り立っている＞＜自分で気付かない部分はチェックしあう＞＜彼は料理上手で損得なし＞＜私共二人の人柄も信用され＞と尊敬と信頼の夫婦関係を表現している。『夫婦以外の協力』は、＜祖父・父独立独歩の自由業＞＜祖父母と孫の交流＞＜里子たちへのおばあちゃんの影響＞＜おばあちゃんに無条件に素直になれる＞等で「祖父母の協力」、＜出舎の親類と親しい付き合い＞＜親戚に出来る限りの事をした＞等、親戚との良好な人間関係の形成が伺え、

表２　対象者の概要

対象	年齢	概要
A氏	60歳前半	短大卒業後見合い結婚、サラリーマン家庭の核家族 栄養士として再就職、夫は現在畑仕事
B氏	60歳前半	職場の上司からの見合い話になんとなく結婚、子育てに夢中、その後協議離婚、趣味に生きる
C氏	70代前半	夫は病死、クラス会で再会し押しかけられて再婚、相手の家庭に慰謝料払う、飲食店と仕事の両立、その後夫が死亡、第３の人生を送る
D氏	50代後半	学園紛争時期に知り合い結婚、現在の家族は６人（夫婦、姑、三男、里子２人）、舵取り役の夫を尊敬
E氏	60歳前半	団塊の世代、お見合い結婚、身勝手な夫に失望、ダラダラと結婚生活、離婚願望がある

それには当事者の努力と感謝の気持ちが表現されていた。

（２）【社会的活動】は、『仕事の意義と経済性』『趣味と楽しみ』の２つのサブカテゴリーで構成される。

『仕事の意義と経済性』は、「仕事を持つ」として＜栄養士＞＜正社員に復帰＞＜仕事に追われた時期＞＜停年まで働くのを目標＞＜縁あってA町でスナック＞＜玄関先を改造し店舗＞＜忙しくない店・介護・里親＞＜ヘルパーの資格を取る＞、「仕事への積極的意義」として、＜店を13年間、頑張った＞＜自然の食材中心（竹炭・野菜）＞＜障害者・老人の世話をできる限り続けたい＞、「生活費用」として＜勤めのお蔭で一人ぐらしの年金生活＞＜私の会社からの給料で助かる＞＜停年まで働くのを目標＞であり社会と接点がありその中での自分の存在が認知されている表現があり行動的な面が伺える。『趣味と楽しみ』は、「趣味を持つ」、＜トレーニングジムとプール＞＜読書・手芸・音楽・美術鑑賞＞＜コーラス、フォークダンス、社交ダンスを継続＞＜お寺や花の観賞等＞＜ダンスの誘い＞＜西国33ヶ所、四国88ヶ所＞等、「生活の楽しみ」として＜一日に楽しい時間＞＜元気で月１回は飲み友達（80歳）＞＜何れも80歳の品の良い姿勢の良い方＞＜合唱団で毎日を精一杯過ごして＞であった。「健康の維持」として＜朝6時30分に起床＞＜10歳程若く見られる＞＜体調の自己管理＞＜自分で健康管理＞等、教養を身に付け、健康を自分自身で維持し人間関係を広げ楽しんでいる様子が伺えた。

（３）【子育て】は、子どもの成長』『子育ての喜び』『育児方針』の３つのサブカテゴリーであった。

『子どもの成長』は、「子どもの成長過程」として＜次男の入園＞＜参観日・学校行事に出席＞＜ＰＴＡ役員＞等、＜長男32歳で結婚して家庭を築く＞＜どの子も世間なみ＞＜親を超えて立派に成長＞等、『子育ての喜び』として＜かわいい命の為に頑張る＞＜子育てに追われ夢中＞＜子育てをしながら自分も育った＞＜子どもに恵まれた＞等、＜退職の１年前にＹ子を引き取る＞＜子育ての現役＞等、「里親として養育」にやりがいを見出している記述もあった。『育児方針』は、「母親の育児姿勢」として＜休日には、子どもを連れて外出＞＜共稼ぎ・子育て中心＞＜教育ママ＞等育児、教育に前向きであり、労を惜しまない姿勢がみられた。「父親の態度」として＜世界中で一番好き（子ども）＞＜やはりスペア（兄弟）がいる＞があった。

（４）【高い自尊感情】は、『肯定的洞察』『自己の存在の意味』の２つのサブカテゴリーで構成され、役割を自覚し、自分自身の自己評価ができた表現である。

表３　結婚体験の振り返り　（記述数）

肯定的表現		
カテゴリー	サブカテゴリー	コード
夫婦仲(39)	夫婦の努力(20)	夫婦の形態(7) 出会い(7) 夫(妻)の思い(6)
	夫婦の認め合い (10)	夫(妻)の生き方(4) 夫(妻)からの尊敬(3) 夫(妻)の社会からの信頼(3)
	夫婦以外の協力(9)	祖父母の協力(5) 親戚付き合い(4)
社会的活動(33)	仕事の意義と経済(18)	仕事を持つ(10) 仕事への積極的意義(5) 生活費用(3)
	趣味と楽しみ(15)	趣味を持つ(7) 生活の楽しみ(4) 健康の維持(4)
子育て(30)	子どもの成長(15)	成長した子ども(8) 子どもの成長過程(7)
	子育ての喜び(9)	子育てへの思い(6) 里親としての役割 (3)
	育児方針(6)	母親の育児姿勢(4) 父親の態度(2)
高い自尊感情(24)	肯定的洞察(18)	自己への称賛(8) 自分の生き方の感想(6) 結婚観(4)
	自己の存在の意味(6)	母親としての責任(3) 仕事上の活動(3)
否定的表現		
カテゴリー	サブカテゴリー	コード
生活上の困難(30)	育児・介護の悩み(16)	親の介護問題(9) 子どもの悩み(7)
	経済的負担感(14)	経済的困窮(6) 過酷な労働(4) 富裕の禍(1) 生活形態(3)
自己の負担感(26)	他者からの介入(12)	他者による混乱(8) 親戚の負の関わり(4)
	否定的過去の記憶(9)	過去の後悔(6) 自己の振り返り(3)
	性への不安(5)	女の性(4) 性への価値観(1)
夫婦の乖離(23)	妻の苦労(13)	苦難の状況(7) 夫が認められない(6)
	夫への不満(10)	自己中心的な夫(5) 夫の反社会的行動(3) 幼少時のトラウマ(2)
希望表現		
カテゴリー	サブカテゴリー	コード
これからの人生の生き方 (22)	自己の信条(16)	私の格言(11) 現在の心境(5)
	良きパートナー(6)	新しいパートナー(4) 良き夫(2)

『肯定的洞察』は、「自己への称賛」として＜夢見る夢子そのまま老婆＞＜こんな女はまあ居ない＞＜荒波が押し寄せてもビクともしない＞＜一生懸命、自分なりに幸せ＞＜やはり若かったし情熱もあった＞＜人より数倍楽しい思い＞＜家での活動は結構楽しい＞＜長年人生を生きてきたオーラ＞等、生き方や考え方を人生体験の結果から自分を認める表現がある。「自分の生き方の感想」として＜今、元気で毎日好きな事をさせてもらえ一番幸せ＞＜やはり若かったし情熱もあった＞＜負担をかけない様につつましい付き合い＞＜ヘルパーさんとは友達になれた＞等、これからの健康に重点をおいた生活を考えている。「結婚観」として＜見合い話になんとなく結婚＞＜資産家に後妻の話＞＜学歴や勤務先が想像でき決めた＞＜健康に自信がなければ新しい人との生活は考えられない＞等、昭和前期を背景とした考えが伺える。『自己の存在の意味』は、「母親としての責任」として＜母として、祖母として幸せ＞＜離婚した奥さんや子供への慰謝料・学費＞＜Aニュータウンに立派なお墓（息子の名前）＞等、「仕事上の活動」として、＜お店にこられる方と親しく＞＜専業主婦ではない＞＜介護サービスを上手に使いクリアー＞等、自分の置かれている立場をエネルギッシュにこなしている表現があった。

2）否定的表現のカテゴリーは、【生活上の困難】【自己の負担感】【夫婦の乖離】が抽出された。

（1）【生活上の困難】は、『育児・介護の悩み』『経済的負担感』の2つのサブカテゴリーで構成される。

『育児・介護の悩み』は、「親の介護問題」として＜夫と実母の仲が悪い＞＜夫の母は、介護度5＞＜10 年間特養で暮らしていた義母＞＜75 歳から痴呆の症状、アルツハイマー＞＜施設入所＞＜福祉施設事務所の人の発言で即入院＞＜いつ迎えに来る、早く迎えに来て＞＜寝たきり状態＞＜介護で拘束＞等であった。また「子どもの悩み」は、＜育児のノイローゼ＞＜子どもの教育費＞＜子どもの教育への悩み＞＜子どもにかまってやれない＞＜子どもにこんな話は一切出来ない＞＜親から見捨てられささくれた心＞＜子どもと私だけで遊園地に出かけた＞等、過去の育児はトラウマ的な要素が伺え、現実では介護の負担が表現されている。『経済的負担感』は、「経済的困窮」として＜新築予定＞＜貧しい暮らし＞＜エンゲル係数は高い＞＜店の家賃が高い＞＜年収は二桁のわずかな額＞＜3 年前に退職＞等、また「過酷な労働」として＜働いて家計を支えた＞＜会社勤めは一日も怠る事は出来ない＞＜朝から夜おそくまで働いた＞＜私は無償で労働＞等、技術職や専門職的なやりがいのある仕事の表現はなく、生活を支えるための労働が伺えた。「生活形態」として＜サラリーマン家庭＞＜せまい家＞＜実母と同居＞等、高度成長期を感じる表現であった。

（2）【自己の負担感】は、『他者からの介入』『否定的過去の記憶』『性への不安』の3つのサブカテゴリーで構成される。

『他者からの介入』は、「他者による混乱」として＜あの人は苦労している＞＜表向きは専業主婦＞＜小さなアパートを借り私も家を出る＞＜死ぬほどの苦しい想い＞＜彼は、私の実家に何度か行ったが会えなかった＞＜恋に恋して破れ＞＜長く傷心＞等、であった。「親戚の負の関わり」として＜元妻として出ていくのか（親戚への対応）＞＜主人の親戚は私を悪人と思う＞＜親戚は何もしてくれない＞＜中元歳暮を送る以外に交流無い＞等、夫婦関係の中で、妻としての役割からの負担や誰からのサポートもない孤立感を表現していた。

『否定的過去の記憶』は、「過去の後悔」として＜今思うと、単純な物事の考え＞＜私は、どんなことがあっても離婚だけはしない＞＜「私は苦労しています」と自ら発することはない＞＜大変なことになった＞＜柳の下に何時もドジョウはいない＞＜自らを追い詰め自殺を考え＞等であった。「自己の振り返り」として、＜金銭的な面は全部私が用意＞＜50代は若いと思い励みになる＞＜還暦が節目＞

等、また『性への不安』は、「女の性」は＜大海原に浮かぶ小船の様な危うさ＞＜体内からフツフツと湧き起こる性のさま＞＜抱かれたい、抱きしめたい＞＜そんな夜が切ない＞等、離婚後の性生活の寂しさを素直に表現し、自分自身を縛っている感じも受け取れ、「性への価値観」として＜浮気・再婚できない＞と自分自身を拘束していた。

（3）【夫婦の乖離】は、『妻の苦労』『夫への不満』の２つのサブカテゴリーで構成される。『妻の苦労』は、「苦難の状況」として＜協議離婚＞＜昭和○年○月癌で亡くなる（53歳）＞＜60歳を過ぎて夫が体調を崩す＞＜胃潰瘍、肺癌＞＜２回の大手術＞＜定職を持たない夫と一緒に生活をスタート＞等、「夫が認められない」として＜いつも別行動で離婚も考えた＞＜仲人の紹介結婚が多い世代＞＜ダラダラ今日まで＞＜２人目を産むのに夫が反対＞＜優しい言葉をかけるでもなく、プーっとふくれ顔を４年間＞＜主人はめし、風呂と用件のみしか話さない＞等、男尊女卑や亭主関白が一般的であった時代背景に、翻弄された様子が窺える。『夫への不満』は、「自己中心的な夫」として＜夫の言葉「親が親なら、子も子だ」＞＜主人は子どもに八つ当たり＞＜クラシックのレコードマニアで日曜日も趣味の時間＞＜退職後一日中テレビを見ているかレコード鑑賞＞＜本か新聞を読んでいる位で、暇なので朝から私にからんで来る＞等、夫が妻や子を認めた表現がみられず、自己中心的な態度が感じられ、コミュニケーション不足が伺える。「夫の反社会的行動」として＜妻子を残して乗用車に当座の物だけ持って＞＜お金は何も持ってない＞＜自分の意志で家を出て来た＞等であった。また「幼少時のトラウマ」として、＜両親の離婚騒動＞＜ご飯が喉を通らなかった経験（両親の喧嘩）＞等で親との関係が表現されていた。

３）希望的表現のコアカテゴリーは、【これからの人生の生き方】が抽出された。

（1）【これからの人生の生き方】は、『自己の信条』『良きパートナー』の２つのサブカテゴリーで構成される。

『自己の信条』は、「私の格言」として＜明るく前向きに日々精進＞＜一からの出直し＞＜大いなる期待と野望に胸ふくらませる＞＜私は、私として私らしく＞＜目的をもって、やりがいをみつけて＞＜一日一日を力いっぱい＞＜人生なげずに、めげずに＞＜意欲と根性＞＜いつ死が訪れようと可なり＞＜覚悟してあせらず＞＜こころ穏やかにこれからも熟なる老いの道＞等、「現在の心境」として＜しっかり物事が受け止められる自分＞＜いつも新しい気持ち＞＜学ぶということにわくわくする＞＜年を取ると籍を入れない結婚がよい＞＜もうピリオドにしてもよい＞＜私の人生＞等、生き方として若々しくたくましい表現であった。『良きパートナー』は、「新しいパートナー」として＜気の会う友人を持つ事が良い＞＜主人が亡くなり子どもが許してくれるなら（再婚）＞＜私を愛し理解してくれる優しい言葉も掛けてくれる人と暮したい＞＜よい出会いがある事を願っている＞等、「良き夫」として＜夫の子どもを指導するすぐれた指導力＞＜舵取り役の夫がいてこそ成り立っている＞等、長年支えあって尊敬した表現であった。

Ⅴ．考察

１．結婚体験の肯定的表現から

本研究の対象者は、社会・文化的背景に日本の高度成長期を支えた世代である。その中高年女性の結婚体験の肯定的表現として【夫婦仲】は、夫婦関係において、夫婦として出会い、お互いの努力から、認め合う存在として発展し、自分を理解し認めてくれる相手として、尊敬、信頼、頼れる存在となる。また祖父母や親戚は、嫁の努力を認めており、また嫁としての努力が良い関係性を保つと考えられる。【社会的活動】は、仕事を持っている人と専業主婦では、社会との関係や価値観に違いがあるが、仕事や趣味を通じて自信を持ち肯定的な感情として自分を認めていると考えられる。仕事や趣味等を日常生活の中に有効活用ができる世代であった。【子育て】は、

昭和世代の特徴である子育てへの達成感や生きがいを見出している。また子どもは、母親の意思に答えて成長し、母親としての満足感となったと思われる。【高い自尊感情】は、今までの多くの役割をこなした自分を肯定し、自尊感情を高め、これからの残された人生や健康に対して、重点を置き老後の生活を考えている。またこれらの達成感が、ハビーガースト（1958）の老年期の発達課題の一つである、社会的、市民的に責任を引き受けることに、繋がっていくと考えられる。

2．結婚体験の否定的表現から

結婚体験に対する否定的表現の【生活上の困難】は、「育児・介護の悩み」として、女性役割（ジェンダー）に縛られ、母親、嫁としての責任が重くのしかかり、否定的になったと考える。「経済的負担感」として女性役割以外にも、労働を強いられ、生活に疲れ、相手に思いやりをもてない状況に追いつめられており、否定的な感情になったと考える。【自己の負担感】は、離婚ができないという価値観に影響された世代であり、その中で夫婦関係に負担を感じ、誰からもサポートがなく社会からの孤立感を感じていた。夫からは現代でいうＤＶ、言葉の暴力や無視を受けており、ハビーガースト（1958）の成人期の発達課題の一つである、自分と配偶者とが人間として結びつくことができないことへの葛藤であると考える。「女の性」では、離婚後、自己も社会もイメージを女性としてではなく、母親役割で縛って生活を送っていたと思われる。離婚後の女性には、評価が厳しく閉塞的であったが、男性の再婚へは寛大である社会であった。これは、戦争時代を生きた親モデルから受け継ぎ、岡堂（2006）の言う夫婦の契り（関係）は、運命であって離婚によって終わらせてはいけない倫理的規範にしばられた世代であり、男尊女卑や亭主関白が一般的であった。受け入れられない妻は【夫婦の乖離】として、男女同権の戦後教育に翻弄された様子が窺え、夫の歩みよりがないと夫婦の考え方は平行したままであり、乖離した状況を招くと考えられる。夫が妻や子を同等な人として認めず、自己中心的であり、コミュニケーション不足から生じることが明らかになった。

3．生き方を支える要因

結婚体験の振り返りから生き方を支える要因として、希望的表現から【これからの人生の生き方】は、過去の人生体験から得られたことを教訓とし、これからの生き方についての目標や覚悟が感じられる。また良きパートナーの存在に対する畏敬の念や新しいパートナーへの期待が見え、未来を感じさせ自分に自信を持っていると思われる。しかも依存的ではなく、自分の考えをしっかり持っていると感じられた。中澤ら(2009)が、中高年者の統合感には、これまでの人生の受容と、現在取り組んでいる課題(エネルギーの再方向づけ)の有無が関連していると述べている。すなわち、今までの自分の生き方の足取りをしっかり認識できており、これからの生き方にも、価値、信条を見出して、生きていくエネルギーとしていた。またハビーガースト（1958）の言う、生活することは学ぶことであり、成長することも学ぶことである。そして人間は一生涯学習を続けるものであるということを踏襲していた。

4．研究の限界と課題

本研究の対象者は、老後を考える会の参加者であり、積極的に高齢期を向かえる準備を行う姿勢があると思われる。また５事例と個人の体験記に偏るため一般化するには限界があり、事例を重ねて検討する必要がある。

Ⅵ．結論

本研究は、中高年女性の結婚から人生を振り返った体験記を分析し検討した結果、次のことが示唆された（図 1)。

1．自分の環境の中で、自己を肯定できる状況を作り出す力

中高年女性は、夫、子どもの人間関係だけでなく、自分の仕事や趣味、社会との関係を保ちながら、伝統的社会規範の中で悩み苦しみつつ自分の考え方を変化させ、自己肯定感に結びつけて、活き活きとまた我慢しながら

人生を歩んでいる姿が浮かび上がってきた。

2．半生を整理し自信を持って、次の人生に踏み出そうとしている思い

対象者自身が結婚体験・人生の振り返りによって、半生を整理し自信を持って次の人生を踏み出そうとしている思いが読み取れた 。また自分の環境の中で、肯定できる状況を作り出す力によって、新たな考えを生むことが明らかになった。

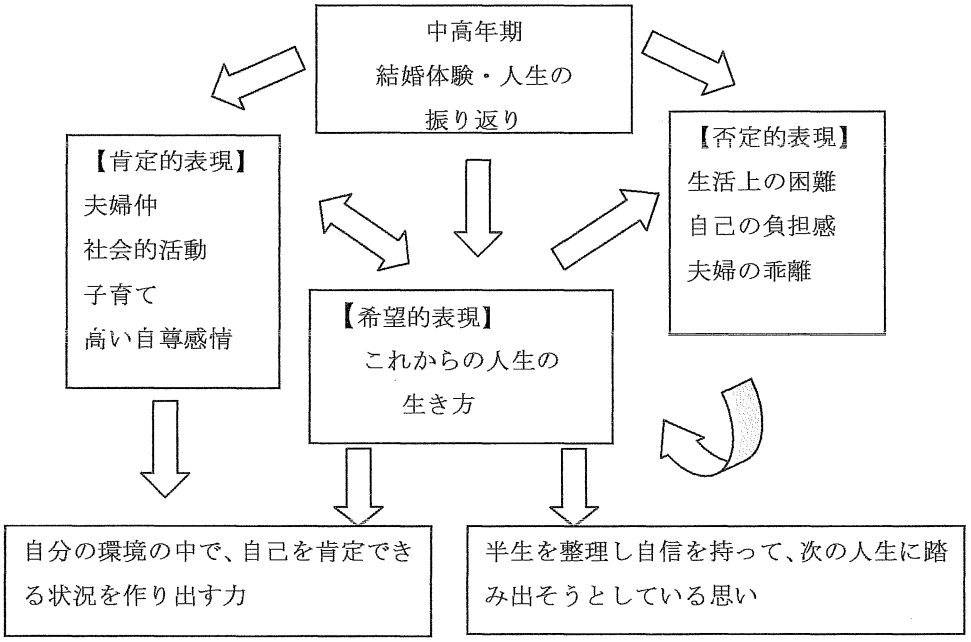

図１．結婚体験・人生の振り返りの関連図

引用文献

Havighurst R ,庄司雅子訳（1958）：人間の発達学と教育. 牧書店

松木光子編集（2003）：看護学概論看護とは・看護学とは. ヌーベルヒロカワ：74-76

宮内博一（1994）：老いの生と性. 海竜社：118－120

中澤明美，服部紀子, 佐野望（2009）：中高年者が語る過去の生き方と現在の統合感との関連．共立女子短期大学看護学科紀要，(4)：67-74.

岡堂哲雄（2006）：家族というストレス，新曜社：21

大西守、寺沢英理子（2008）：精神科臨床サービス（1883-0463），8巻2号：280-282

参考文献

A Portman,八木龍一（2006）：生物学から人間学へポルトマンの思想と回想, 新思索社

淺川千尋等（2005）：家族とこころ，世界思想社

合田加代子（2006）．高齢者の一人暮らしを支える要因に関する研究　脆弱化後期高齢者の「我が家」での一人暮らしを支える要因. 香川県立保健医療大学紀要，2:43-51

川村匡由（2008）：家族福祉論，ﾐﾈﾙｳﾞｧ書房

黒谷万美子（2003）：高齢期に向けての準備行動に関する一考察－生活行動とソーシャルサポートの関連から－．日本看護福祉学会誌，vol.8 no.2

野村豊子（2000）：回想法とライフレヴュー――その理論と技法. 中央法規出版

佐藤博樹等（2005）：団塊世代のライフデザイン. 中央法規

竹中星郎（2003）：高齢者の孤独と豊かさ. ＮＨＫブックス

田高悦子，金川克子，古川照美（2007）：農村部の一人暮らし高齢者における自立の意味に関する記述的研究．日本地域看護学会誌，10(1)：78-84

山田昌弘（2002）：家族というリスク. 勁草書房